327
933

平和出版社發行

327-933

序にかへて、

著者と

其の愛馬

大正
9. 2. 21
内交

March! March!

目次

アルプスの雪……一
筑後川の戰……二
オルレアンジヤンダークの奮戰……三
ホーヘンリンデンの夜襲……四
桶狭間の戰……五
大物見……六
巴……七
參平……八
クリミヤの戰爭……九
トラフアルガーの戰……一〇
ヴエルダンの戰……一一
奉天大會戰……一二
南北戰爭……一三
米西戰爭……一四
ザルーヘルドの戰……一五
モスコーの岳……一六
リエージの戰……一七
英獨海戰……一八
戰の夕……一九
ルゾンヴイルの騎兵戰……二〇
ブレドー旅團の襲擊……二一
普墺戰爭……二二
ライプチヒの戰……二三
フリードランドの凱旋……二四
コリンの戰……二五
トルゴー戰……二六
ロースバツハの戰……二七
フエールベルリンの戰……二八
スレーシーの戰……二九
金字塔の下に……三〇
ライヘンバツハの戰……三一
スーダンの戰……三二
クロンウエルの鐵騎隊……三三
長篠の露……三四
黃海の海戰……三五
海洋島沖の戰……三六
喇蹄舘の吹雪……三七
川中島……三八
鐵木眞……三九
カツツバツハの戰……四〇
三帝戰……四一
白河殿の夜戰……四二
前九年……四三
後三年……四四
獨立戰爭……四五
平壤城の戰……四六
ライン河畔の進軍……四七
日本海の大海戰……四八
ウエリントン將軍……四九
ワーテルローの戰……五〇
宇治川の先陣……五一

サン、ベルナアの嶺高く雪滿山を埋むれば響は凄しアバッンチ難きをしのさ給を越へ見わたす大野草青く馬は肥へたりアレンゴウ

當時國賊擅島蚤
勤王諸將向後沒
遺詔豆箱猶在耳
大舉來犯被何人
河亂軍鋒代衛枚
馬傷胄破氣益奮
被箭如蝟目皆裂
踢來河水笑洗刀

七道望風助刈狼
西陣淫存臣武光
擁護龍種同生死
誓剪滅之報天子
乃敢相摩八千師
斬敵取胄奪馬驕
六萬賊軍終挫折
血注弁嚙滿紅雪

菊地武光

オルレアン ジヤンダークの奮戰

オルレアン原頭戰雲ふかく
大砲小砲ときの聲
黑煙濛々、光閃々
亂れ調子の喇叭の音

ホーヘンリンデンの夜襲

（4）

夜はいとたけて見ゆる頃
不意に打ち出す大砲の音
すはことありと大將は
暮なす空や冬の夜や
暗をば照すあかりをば
つけよつけよと命じたり

喇叭の聲や炬火の
あかりによりて速かに
玉ちる劍ぬきつれて
手荒き馬は恐ろしく
身の毛もよだつもてなしに
いとも雄々しく嘶けり

名譽に滿つる軍馬かば、
敵の陣地に乘り入るゝ
音はさながら電の
ひらめく如く由をかも
震ひ起りてぬば玉の
暗にきらめく大砲は

秋は紅葉のそれならで
から紅にまだらなす
ホーヘンリンデン丘の上
照す電いやあかく
濺つ瀨をなすイーザーの
流るゝ水の音高し

前田犬千代の奮戰

（關ヶ原の戰）

馬は春風とて信濃
第一の強馬なり一
騎あてゝあをりた
れば鎧の袖ふつと
引切れて二段計り
ぞ延びにける

日本一の剛の者
主の御伴に
自害す
見習へや
東八ヶ國の
殿原

バーの役

バラクラー

一里半なり一里半
進びて進む一里半
死地に乘入る六百騎
將はかゝれと令下す
士卒たる身の身を以て
譽をたゞすは分ならず
答をなすも分ならず
是命これに從ひて
死するの外はあらざらん
死地に乘入る六百騎

右を望めば大砲ぞ
前も左も赤砲ぞ
共に打出す砲聲は
天に轟くいかづちの
響のごとく凄まじや
彈丸雨飛の間にも
猛り立つてぞ進むなる
死地にこそ入れ鵬の口
勇んで乘入る六百騎

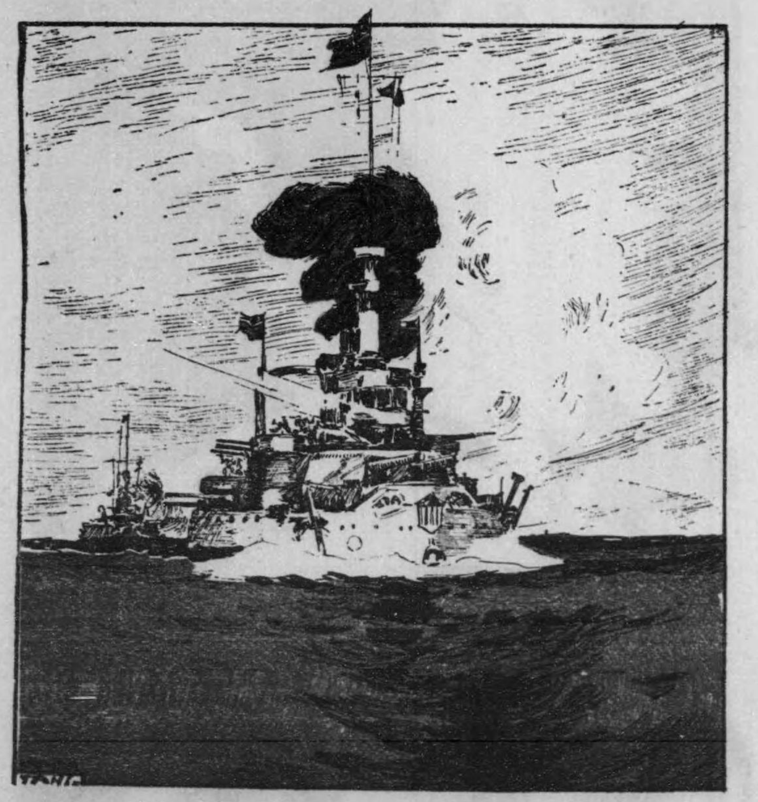
拔けば玉ちる刃をば
揮むるとともに振り上げて
きらきらきらと輝けり
敵陣近く乘りかけて
大砲方をなで斬りに
いと目覺しき働きぞ
煙の中に飛込みて
激しく陣を破るなり
太刀の早業見事なる
敵の軍勢たぢたぢと
遂に支ふることならず
群々はつとむらくずれ
馬の頭ぞ立直す
以前に進みし六百騎
殘るはいとど僅かなり

遠巻く婦人
もの上せ
ずブリツ
ヂに立つ
人や誰
双眼鏡を
目にあて
てネルソ
ン提督自
若たり

入營場面の兵隊國俗

ゲランド將軍の勇姿

却退の軍將シキトバ



サンチャアゴ沖の海戰

死戰の子爵ドルヘルーザ

モスコーの岳

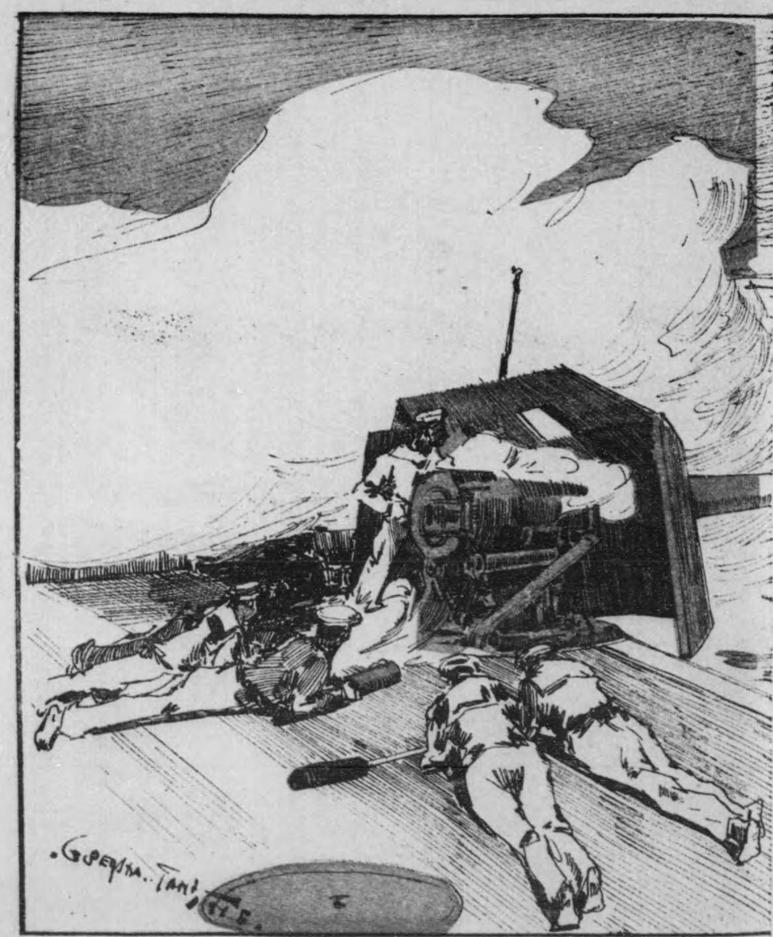
(16)

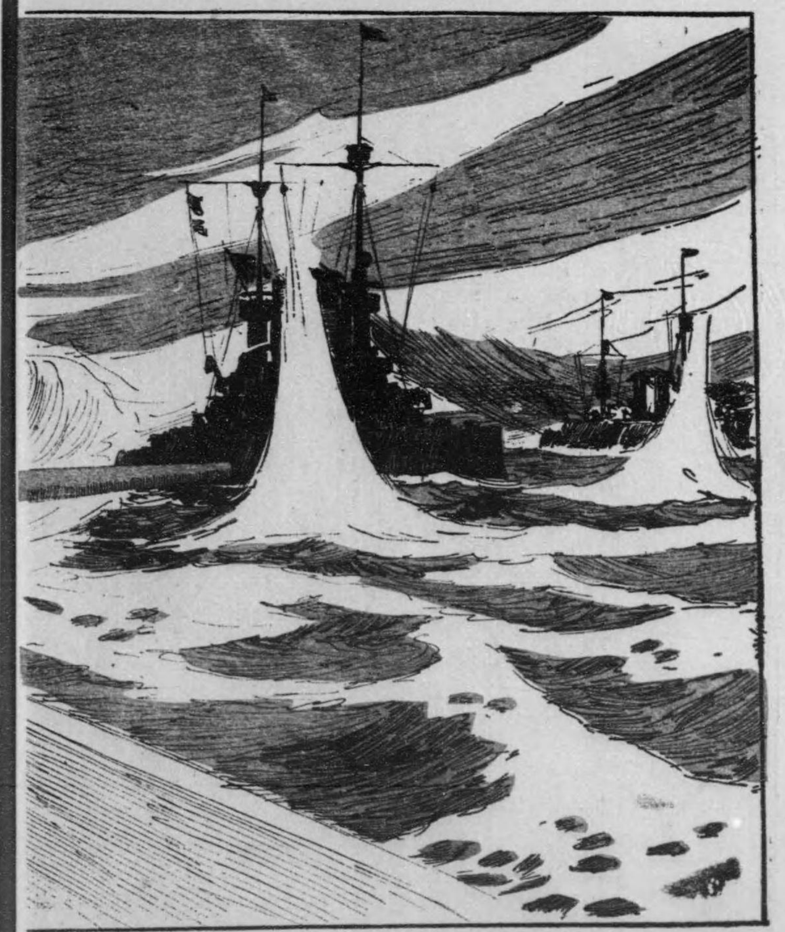
玉樓の春短き
魚龍淋しき
秋の水
花はうらかれ
香は消へ
ほまれの星も
落ち行けば
君蒼世の
勇いづこ
焰は狂ふ
モスコー府
吹雪は亂る
ボロヂノー

リエージの戰

(17)

落日の影薄き戰禍の都
街道の家破れ寺鐘覆る處
行き暮れて敗殘の
人は悲しむ
黄昏のリエジ古要塞の
ほとり
埋れし城壁の廢墟遙かに
糸の如棄てられし
壕塁の見えて
馬翔ける騎兵の
鐵の蹄に
冷やかに凡の秣が廻る
饑餓せまる祖國の人々
今日も亦フランスの
空を眺め
飛行機の撒布する
便りを夢む
あはれ哀し白耳義の
非戰鬪員





悲慘の極は血の涙
飛び來る彈は淸なく
數多の勇士は打斃れ
主なき馬ゐ走るあり
身は又傷を蒙るに
馬の斃れて友軍の
蹄露と消ゆる者もあり

白胸騎兵

露光量違いの為重複撮影

後のルーマライーマ

義を見て勇む武夫の
心の内ぞ床しけれ。
屍は野邊に晒すとも
玲瓏の月は清く輝り
芳名長く後の世に
聞かすや高く歌はるゝ
ブレドー旅團の襲撃を

後のツレダヒニーム

露光量違いの為重複撮影

露光量違いの為重複撮影

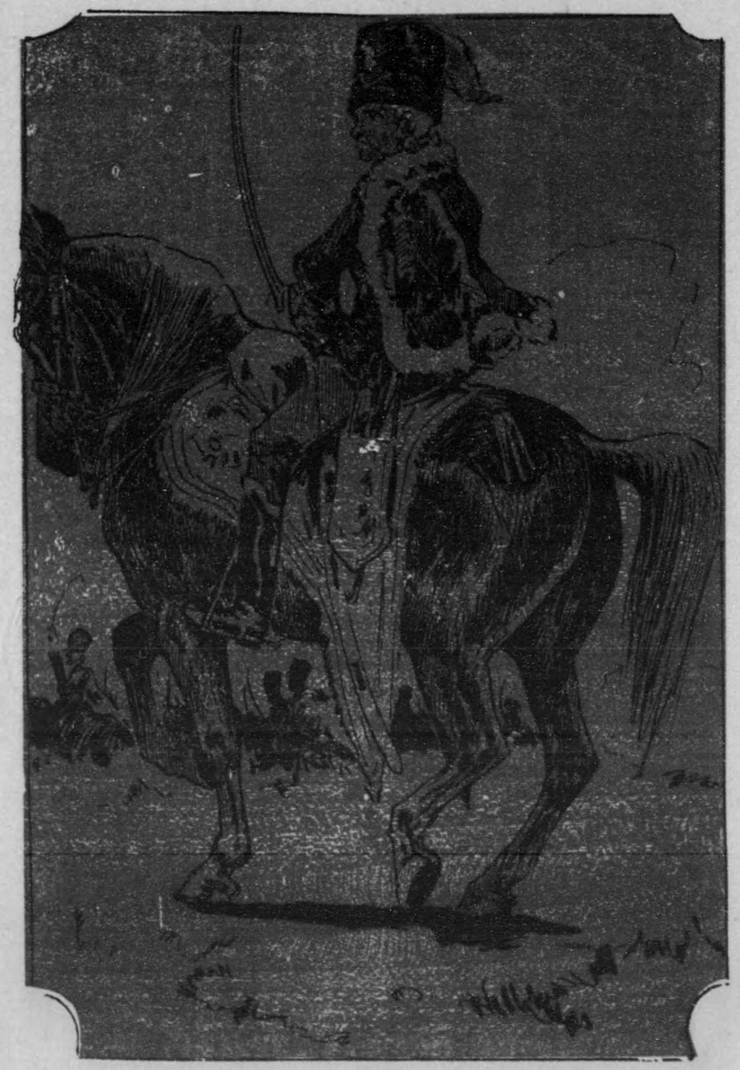
ポニヤトウスキー皇子の戰死

イアーナ、ワグラム
雲暗し
フリードランド
風あらし
いかづち落つる砲彈の
渦巻く刈りかきわけて
君がかざせる鷲の旗
飛電のつるぎ閃けば
列王つちに膝つきて
見よもろ〳〵の國民は
震ひよどめり海のごと

露光量違いの為重複撮影

露光量違いの為重複撮影

ンウダ將塡



トルゴ一戰に於ける勇將チーテン

露光量違いの為重複撮影

戰ーゴルト

(26)

戰のンリコ

(25)

ーチツリトイザ將大兵騎はセ迫に先

黑太子の畜戰

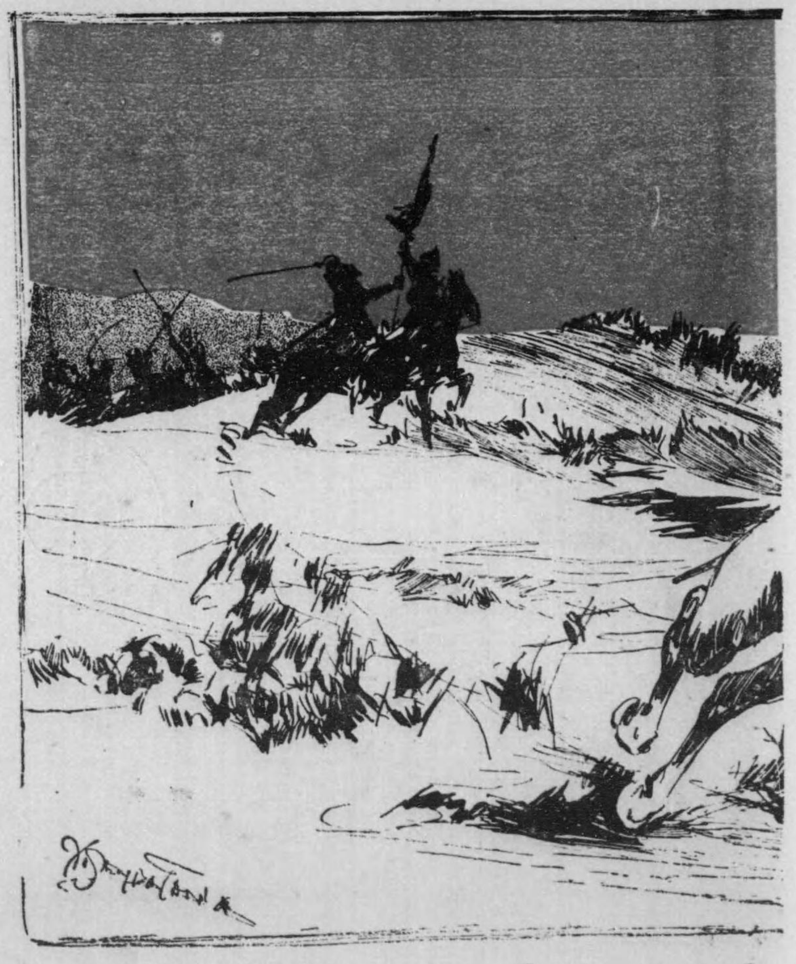
敵近し、敵近し
ピラミット
默して立てども
地を吹きすぐる
風あらく
殺氣は天を
朱に染めん
戰士の心
いきみたつ

王大とリ

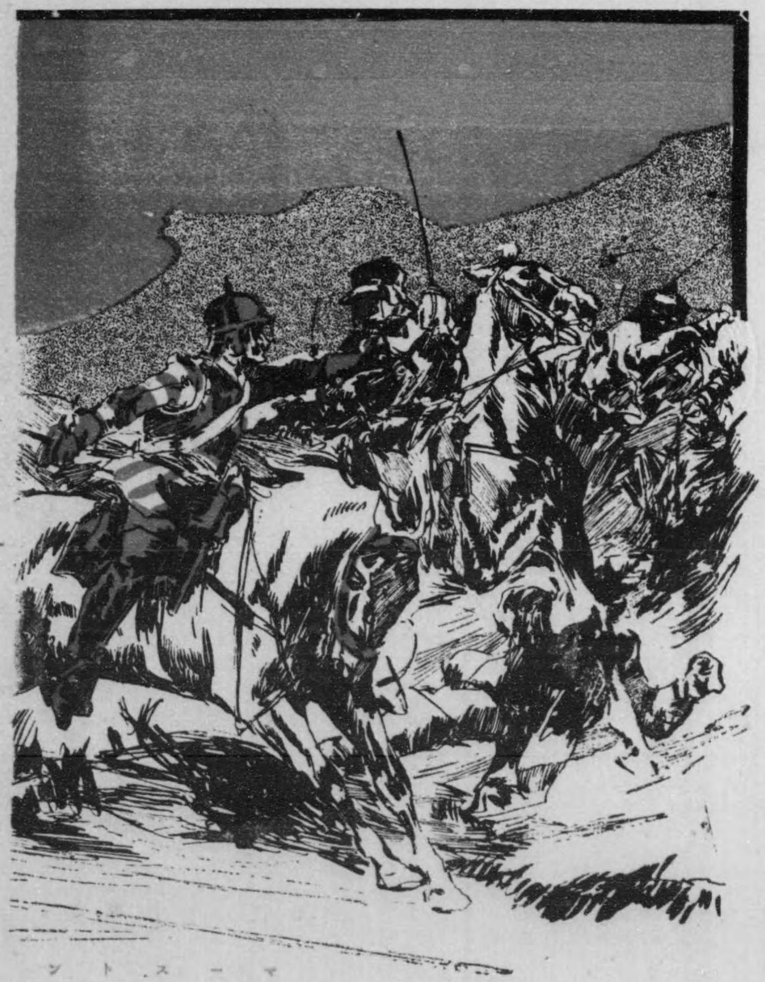
ファーリ

る英國騎兵の襲撃

オヒツルヤにおけ



敵のルーモ

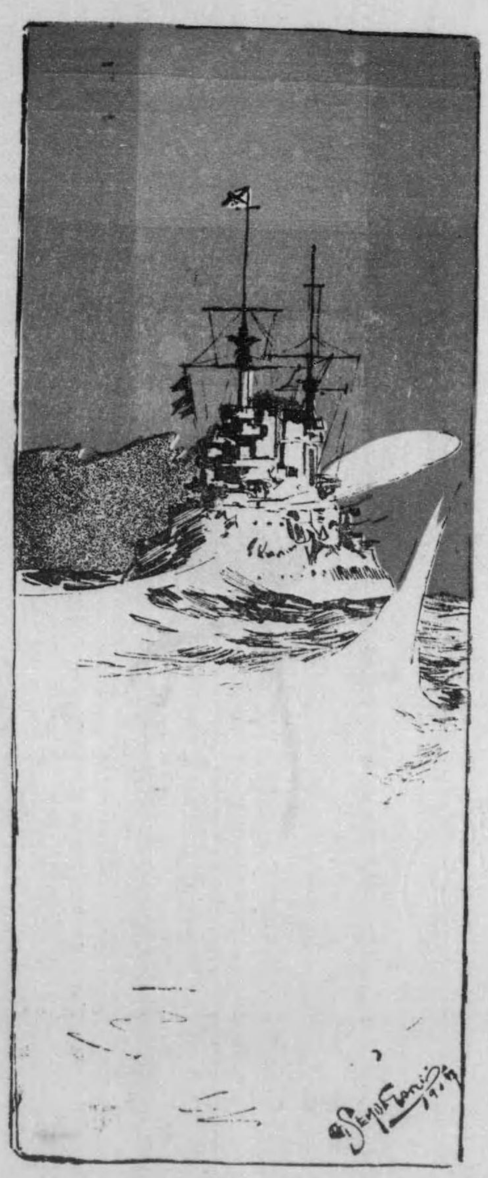


ントスーマ

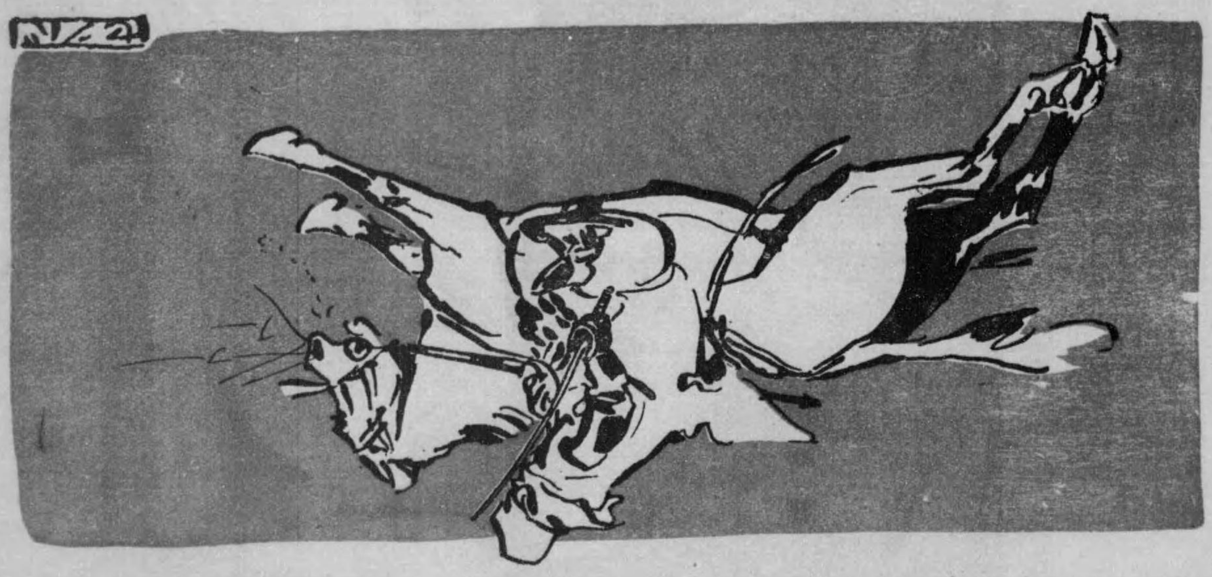
武者の全滅

甲斐の騎馬

欠



八月十日（黄海の海戰）敵ノ旗艦ヲセザレツイッチの苦戰（日露戰爭）



ドラ

禁無断転載

著作権者＆発行人
発行所十市啓一郎
発行年月日昭和四十九年
定価　円

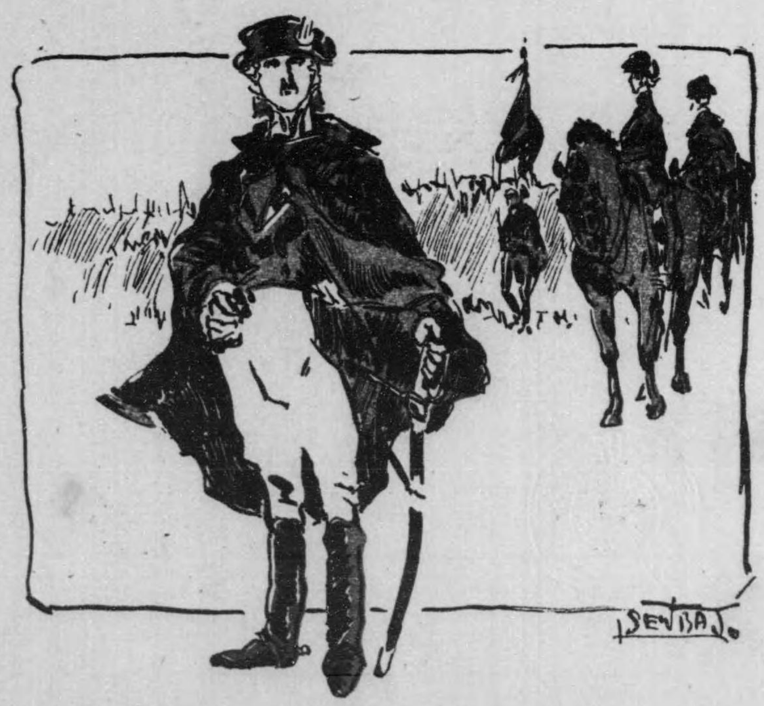
SEMBATANI

欠

オーストリツツの朝風に
同盟軍の旗高し
至尊の指揮に奮立つ
二十餘萬の壞滅軍
君の鋒先向ふとき
散りぬ風に葉のごとく

武夫の
とりつたへたるあつさゆ
引きては人の
かへすものかは

欠



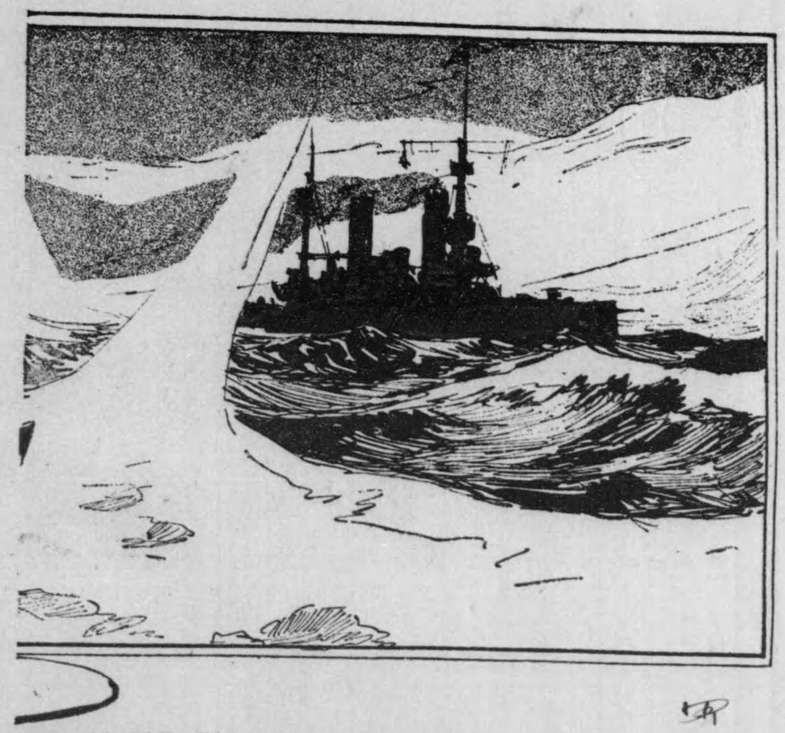
▼シントン

天は許さじ良民の
自由をなみする虐政を
十三州の血は近り
ここに立ちたるシントン
ロツキー嵐吹き荒れて
ハドソン灣に浪さわぎ
劍戟ひゞき軍馬嘶く
スハ戰の鬨の聲
勝利を告ぐる喇叭の音
國の父ぞと仰がれて
ミシガン湖上秋月高く
輝く君がその勳

日大洞江は廣けれど
清劍鶴山は高けれど
の忠勇無双の我軍は
役苦もたく越えて進みぬり
白頃しも秋の十六夜の
馬月に閃く日本刀
隊の
の砲煙彈雨透間なく
全平壤城を取り圍む
滅

ルセヒツル

ブ猛の蕃



皇國の興廢此の一戰に在り各員一層奮勵努力せよ

ウエリントン將軍

於にスンヤリラ、ベ、ラ

戰ひいまはたけなはに
砲煙は遠寄き
砲聲は雷と轟く
決死の勇士一隊の
木の間に開く散兵や
はらはらはつとちるさまは
秋の木の葉にさも似たり
小手をかざして西の方
打ち見やる間に馳せよする
あれは騎兵の一隊か
砂塵は天にのぼるなり
劍のきらめきさながらの
霜夜の月を見る如し
兵士も將もたゞ思ふ
敵も味方もたゞ思ふ

祖國の爲の肉彈と
なりて果つるは軍人の
名譽なりけりこの身なれ
突擊の聲、物の音
をりしも夕陽となりたれば
空の色をして雲は飛ぶ
あゝ
ワーテルローの夕嵐
征戰の襟にうそ寒し

かゝりける所に平等院の丑寅、橘の小島ヶ崎より武者二騎蒐出でたり一梶原源太と佐々木四郎となり

大正六年二月十五日印刷
大正六年二月十八日發行

〔定價八拾五錢〕

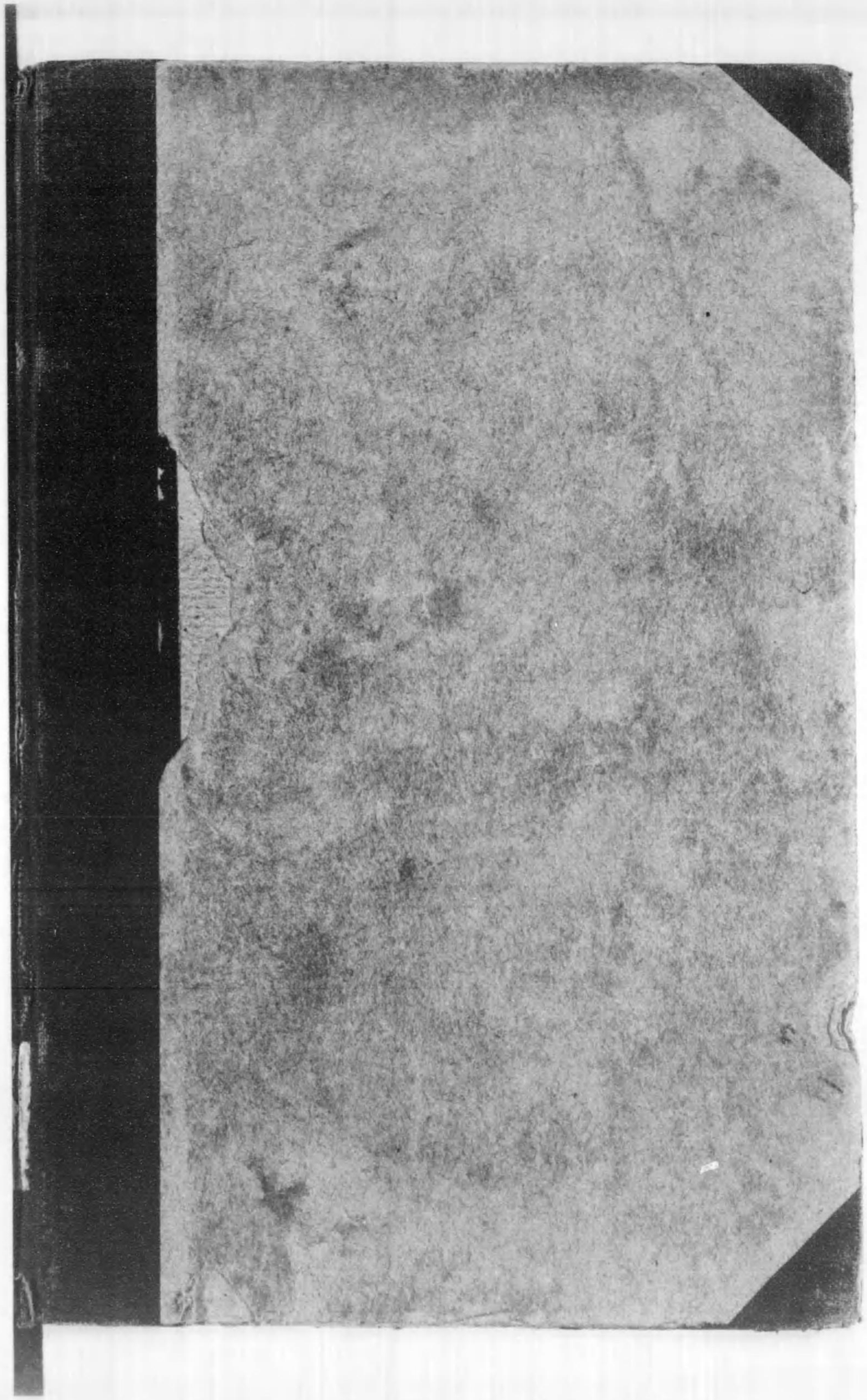
著者印
たゝかひ
不許複製

著者　谷洗馬
發行者　東京市神田區錦町三丁目六番地　富岡直方
印刷者　東京市芝區南佐久間町二丁目十番地　林孝輔
印刷所　東京市芝區南佐久間町二丁目十番地　日能製版印刷所

發行所　東京市神田區錦町三ノ六　振替口座東京八七八七　電話本局三三六六　平和出版社

8. 2. 24

28

727
933

終